

右手に『論語』 左手に商売

私は『論語』で一生を貫いてみせる。

▼『論語と算盤』

『論語と算盤』は渋沢栄一の講演をまとめた本ですが、なぜ渋沢は商売と『論語』が共に必要だと考えたのでしょうか？

渋沢は1873年に官僚を辞職して、当時の日本において官僚に比べて一段も二段も低く見られていた商売の世界に入っています。当時、商売には学問はいらないと考える人も多いうえ、欧米の国々からは日本人は信用をあまり重んじないとも見られていました。

ヨーロッパを知る渋沢は、こうした点を早くから危惧していました。明治維新以降、政治や教育、軍備では着々と成果を上げる一方、商売は期待ほどには発展

せず、これを振興することなしに日本の発展はない、そのためには優れた人材が商売の世界に入り、尽力しなければならぬというのが渋沢の決意でした。

しかし、こうした考えはなかなか理解されず、渋沢も同僚の官僚から「卑しむべき金銭に目がくらんだのか」と非難されます。その際、渋沢は「人間が勤めるべき仕事は至るところにある。官だけが偉いわけではない」として、『論語』を教訓に一生商売をやってみせる、と決心したのです。そこには商売を数段高い所に引き上げ、大いに発展させてみせるという強い覚悟があったのです。